

H A N A Z O N O

# Global

Vol. 5

花園から世界へ！

## 「演劇で、日本人の感性を育てたい」 — “志”を持って突き進む舞台演出家

『天才てれびくん』に出たくて番組にハガキを出し、子役として活動した小学生時代から十余年。アメリカで演劇を学んだ後、今度はメールで猛アピールして、宮本亜門の演出助手になる！

花園のGTN・中村広記先生と、世界で活躍するグローバル人材との対談。第3回目は、演出家・山崎萌子さんにお話をうかがいます。

花園プレス・グローバル



# 経歴よりも、“人間力”。

中村：まずは、山崎さんのお仕事についてうかがいたと思います。山崎さんは、現在（2016年1月）、宮本亜門さん演出の舞台『SUPERLOSERZ』で演出助手をされているそうですね。毎日、どのようなお仕事をされているのですか？

山崎：今日は、昼と夜の二回公演の日で、たった今、一回目が終わったところなんです。今回もそうなのですが、お稽古が終わって初日の幕が開くと、演出家は現場から離れてしまうことが多いんですね。なので、今の私の仕事は、亜門さんの作り上げた作品を、そのままの最高の状態で、最終日までお客様にお見せすることです。具体的には、毎回の公演を見ながらキャストやスタッフの動きに関して気がついたことをメモしておいて、後でみんなに伝えて回ったりしています。

中村：山崎さんはまだお若いんですよね。年上の役者の方に意見したりするのは、難しくはないですか？

山崎：私は結構、思ったことを言ってしまうですね（笑）。自分の意見を言うことの大切さは、留学中に嫌というほどわかったのです。日本の現場でも、お客様に良い作品を観ていただくためと考えれば迷いませんし、そのときは「嫌われてしまうかな」と思っても、実際には、後から感謝していただくことの方が多いですよ。亜門さんから、よく「自分を日本人と思うな」と言われています。せっかく留学したのだから、そういう（自分の意見を言える）人は貴重だから、と。

中村：宮本亜門さんをはじめ、世界的に有名な方々と働くというのは、すごいことですね。どのような経緯で演出助手になられたのですか？



## 宮本 亜門（写真中央）

1958年東京生まれの演出家。1987年にオリジナルミュージカル「アイ・ガット・マーマン」で演出家としてデビュー。翌年には、同作品で「文化庁芸術祭賞」を受賞。ミュージカルのみならず、ストレートプレイ、オペラ等、現在最も注目される演出家として、国内外に活動の場を広げている。

## 『SUPERLOSERZ』

宮本亜門演出の舞台。ダンスと音楽とテクノロジーが融合する新感覚ダンスエンタテインメント。出演：千葉涼平（w-inds.）、古屋敬多（Lead）、仲宗根梨乃、KREVA ほか。



山崎：一昨年の春に帰国してすぐ、亜門さん演出の舞台『TEE!TEE!TEE!』に関わったのが最初です。カリフォルニアの大学を卒業してから一年ほど、ハリウッドでエキストラ等のお仕事をしていたのですが、そのときに、この作品のことを知って。私は大学時代から「ノンバーバル（言葉を使わない舞台）」の分野に興味があったので、どうしても関わりたい！ と思って、メールで猛烈にアプローチしたら、現場に入れてもらうことができました。奇跡のような話ですが、実際にお仕事をしてみて、亜門さんは経歴よりも“人間力”—その人自身の魅力を大切にされていると感じました。私の場合は、アメリカの大学で演劇を学んだ、ということで信頼していただいたのと、あとは、とにかくやる気を買っていただいたのではないかなと思います。

## 有名になって、日本の演劇を変えたい。

中村：山崎さんは、いつ頃から演劇に興味を持ち始めたのですか？

山崎：小さい頃、『天才てれびくん』のてれび戦士に憧れて、劇団に入っていたんです。9歳で初舞台を踏んだのですが、そのときに舞台が大好きになりました。ひとつの舞台作品が、キャストやスタッフ、お客様等、たくさんの人の力で成り立っているということに、子供ながらとても感動したんです。当時、私は役者志望だったのですが、今ふり返ってみると、そのときから既に演出家的な視点で「舞台」というもの全体を見て、その全てに惹かれていたように思います。

中村：アメリカでは、演出を専門に学ばれたのですか？ どちらの大学に通われたのですか？

山崎：カリフォルニア州立大学ノースリッジ校に進学して「演劇」を専攻しました。ふつう、大学で演劇を学ぶ場合は、「役者」「演出家」「メイク」等、それぞれの専門のみを学ぶのが一般的なのですが、ノースリッジでは、演劇に関わるあらゆることをひとつの学科で学ぶことができます。舞台の全部が大好きだった私にとっては、理想的なプログラムでした。教授も学生もいい人たちばかりで、何より、私が日本人だからといって変に特別扱いされなかったことがありがたかったです。実技もそうですし、私が英語で何か言おうとして言葉につまってしまった時も「もう一回言ってごらん」って、最後まで言わせてくれたりして。そこで、かなり自分を出せるようになりましたね。

中村：演出家への道を、着実に進んで来られたんですね。今後は、どのようなお仕事をしていきたいとお考えですか？

山崎：演出家になって、日本での演劇のあり方を変えたいです。日本では、テレビドラマや映画は日常的に観ても、舞台を観に行くことってあまりないですよ。まずは、それをもっと身近にしたい。それも、「芸能人」を見るためだけではなく、「芸術」として舞台を観て感動することのできる人が増えたらいいなと思います。もちろん、好きな芸能人を生で見てうれしい気持ちになるのもいいのですが、舞台を「創る」側は、もっともっと、いろいろな工夫をしているものだから。それを「観る」側の力も育っていけば、創る側も、観る側も、どっちもがうれしいし、より心豊かになると思うんです。それを実現するためには、まず、自分が有名になること。それから小劇場に力を入れて、たくさんの人に気軽に観てもらえるような、いい作品をどんどん作っていききたいですね。

## 必ずうまくいくとしたら、何をしたいか？

中村：最後に、花園生へのメッセージをお願いします。

山崎：どんなことでもいいので、自分が「好き」「やりたい」と思うことを、とことんやってみてほしいです。やりたいことがないという人は、「もし必ずうまくいくとしたら、自分は何をしたいだろうか？」と考えてみるといいと思います。「うまくいかないかもしれない」で諦めてしまうのは、本当にもったいないから。お金がないとか、才能がないとか、そんな制限はなし！ そうしたら、必ず何か興味のあることが出てくるはずですから、それを人に話したり、何か行動を起こしてみてください。どこでどう繋がるか分からないので、私も、夢はいつも口に出すようにしています。また、うまくいかないことがあったり、誰かにわるく言われたりしても、負けないように、自分を奮い立たせてくれる言葉を紙に書いて壁に貼っています。そうやって行動し続けていったら、人生は楽しいし、最初は「できない」と思っていたことでも、どんどん「できる」ようになっていきます。

中村：山崎さんの今後のご活躍を期待しております。本日はありがとうございました！



HANAZONO  
Press  
**Global**

花園プレスグローバル、第五号はいかがでしたか？ 自分の夢に向かって挑戦されている山崎さんにお会いして、「今できないことでも、これからできるようになればいいのだ」と実感し、とても勇気づけられました。今後、機会があれば、花園生のみなさんにもぜひ直接会ってほしい人です。第六号もお楽しみに。(May K)